

平成 28 年 6 月 22 日 開会

第 6 回紫波町学校教育審議会 議事録

紫波町教育委員会

第6回紫波町学校教育審議会 議事録

1 日 時 平成28年6月22日 午後6時30分から午後8時30分

1 場 所 紫波町役場 会議室 302・303

1 出席者 塚野弘明 委員
田代高章 委員
石亀孝文 委員
佐藤富美子 委員
藤原美由紀 委員
北條彰久 委員
佐藤謙一 委員
阿部礼子 委員
舘澤友広 委員
今俊晴 委員
福山利賀 委員
作山智子 委員
長澤聖浩 委員

(事務局)

教育長	侘美淳
教育部長兼学務課長	石川和広
こども課長	吉田真理
学務室長	葛博之
学務技査	畠山肇
主任	藤原慎也
主任指導主事	柏崎裕之
教育相談員	畠山秀一郎

講話

- (1)オガールプラザ株式会社 代表取締役 岡崎 正信 氏
演題「まちづくり＝教育」
- (2)外国語指導助手(ALT) ワレニウス・ミカ 氏
演題「ALTから見た紫波の子どもたち」

報告

- (1)第5回審議会議事録について [資料1]
- (2)児童生徒数の推移 [資料2]

議事の概要

(開会 午後6時30分)

○ 事務局

ただ今から第6回紫波町学校教育審議会を開会いたします。

それでは、早速講話に入りたいと思います。それでは岡崎様、よろしくお願いいたします。

(1) 講話概要

演題：「まちづくり＝教育」

講師：岡崎 正信（おかざき まさのぶ）氏

オガールプラザ株式会社 代表取締役

- ・高校卒業まで紫波町で暮らし大学進学のために上京、地域振興整備公団（現都市再生機構）に就職後、3年目に建設省への出向を命じられた。配属は、日本の都市行政を司る都市政策課で、ここで作った法律が中心市街地活性化法。平成9年、10年頃は多くの自治体が建設ラッシュを迎え、紫波町もラ・フランス温泉館を建てた。そして、この年に28億円の借金をして、後のオガールエリアとなる土地を買ったが、税収がピーク時の購入であった。
- ・30歳を迎えた折、父の死を受けて紫波町に戻った。その際に藤原前町長と出会ったが、中央政府で都市再生を手がけてきた人間として期待を寄せてくれた。しかし、再開発や区画整理はことごとく良い結果をもたらさなかった。そこで、自責の念を込め34歳でもう一度大学院へ通った。論文のためにPPP（公民連携：パブリック・プライベート・パートナーシップ）の最先端だったアメリカ合衆国へ渡った。紫波町の10.7haの土地を開発するためのエッセンスを得ようと、フランス人やユダヤ人にヒアリングをして研究し、論文を書き上げたが、これが羅針盤となって今に至っている。
- ・税金を使って地域活性化事業をやった良いのは、黙っていても人口が増えるときだけ。利用者がたくさんいることで維持管理費が捻出できるから。今は、税金で税金が稼げない時代、活性化事業はほとんどが失敗する時代、そういう結論に至っている。だから、オガールベースを作るにあたっては、税金ではなく、6億3千万円を借金した。今は280万円ずつコツコツと返している。オガールプラザにしても1億6千万円を借金している。返済はいずれも滞った事がない。借金返済という行為があるために、一生懸命営業しなければならない。これが税金で始めると、作るときだけ一生懸命でその後の営業は何もなくなる。しかし、返す必要がなくてもハコモノ（建物）と言うものは恐ろしいもので、作るコストの5倍の維持管理費がかかってくる。そのため、補助金はもらわずに自分たちの身の丈に合った資金を金融機関から集めて、建物を使うことによって借金を返済するという責任を負うこととした。
- ・人が集まる工夫をする。集まればお金を使ってくれる。お金を使ってくれれば、この不動産事業は成立する。結果、紫波町の子育て応援施設もどんどん安く利用できる、そんな仕組みを作る。つまり、公共施設（図書館）の集客力を使ってビジネスを興すのが、オガールプロジェクトの考え方。
- ・オガールの普遍的集客力をどう作るか。その一つが岩手県フットボールセンターで、選手は年間4万6千人、観客を入ると10万人がやって来る。図書館は、当初計画の年間17万人に対して35万人、産直マルシェに至っては売上げが県内2位。マルシェも補助金をもらわずに、自分たちでできることをやっている。お金がないから頑張れる。
- ・12年間ほったらかしにされていた10.7haの土地だが、これは紫波町民の土地。今は、

地代と固定資産税を払っており、これで図書館を運営している。図書館の集客力でテナントが潤い家賃も入るといふ、公共施設を維持する方法を発明した。これがパブリックマインドを持った本当のPPPの考え方。

- ・オガールベースの発想は、ピンホールマーケティング。巨大マーケットを奪いに行く戦略ではなく、ニッチ（隙間）で事業を興せとのユダヤ人の教えを具現化して、日本唯一のバレーボール体育館を作った。オリンピックと同じ床材をフランスから輸入、世界標準を整備し、ナショナルチームの誘致も視野に入れている。
- ・時間を作っては世界を周り色々な論文をあさったが、唯一、経済学上で効果が認められている人的集約・集積の方法、それが「教育」である。とにかく、教育に投資することが重要であると。ところがアジア大学ランキングのトップ10に日本の大学がない。投資をしなかったツケなのか、無個性な人材を育ててきた事への世界の評価であろう。
- ・誰にでもできる仕事をする人間を育成するのが今の教育だとすれば、かけがえのない仕事、限られた仕事ができる人間をどうやって育てていくのか。「まちづくり＝教育」と言っているポイントがそこになる。どこかでやっていることには希少性がない。誰もどこでもやっていない教育をベースにした町づくりをする、これがピンホールマーケティングという考え方。
- ・よく「この仕事はゼロを1にする仕事ですね」と言われる。全くそんな考えはなく、むしろ多くの経験と学習で蓄えた100を1にできる発明家の育成こそが、教育の役割と思っている。蓄えがゼロだった人が1を生み出すことはまず無い。インプットがないとアウトプットはできないので、とにかく吸収することである。
- ・紫波町の教育は、単に学力の向上ではなく、地域を背負うリーダーの育成を学校生活で実現することで人材を集めていくこと、教育に対する投資があれば良い。もうこれがあれば、この町に人がやって来る、そう思っている。

○ 会長

大変刺激的なお話でした。私が一番心に残ったのはニッチという言葉です。それで、教育におけるニッチとはなんだろうというのを、これから考えていかなければならないと思います。学校教育という点からすれば、既成の型紙なんです。横並び、皆同じであるということが学校教育だということがずっとありました。そういった状況の中で、紫波町として、どういう風に既成との折り合いを、或いは戦いをしていくのかというのが、ポイントかなという風に今日のお話を聞いて受け止めました。ありがとうございました。

(2) 講話概要

演題：「ALTから見た紫波の子どもたち」

講師：ワレニウス・ミカ氏

外国語指導助手（ALT）

- ・親がフィンランド人だが、育ったのはアメリカ。紫波町に住んで5年目、日本は来年で10年になる。紫波町では、小・中学校で働いているのでほとんどの学校のことは知っている。小学校での英語授業は、5、6年生がメインで話すことが中心。児童はシャイなところはない。中学校だと、1年生は元気だが、2、3年生はシャイだった

り、周りを意識するようになる。これは、思春期で世界共通の事だと思う。

- ・最近、アイコンタクトができない子どもが多いと感じている。オーストラリアにホームステイした中学生によると、ホームステイ先では普段テレビが点いていないとのこと。アメリカでも同様にテレビは番組を特定して使うのが一般的で、食事は家族との会話が優先される。このような背景が作用するのもかも知れない。
- ・アメリカ・オーストラリアでは、生徒全員が部活動に参加することはないが、ここでは全員参加。授業で元気の無い子どもでも、部活では活発に活動しており、同じ生徒でも全く違う面を見ることができて、非常に良いことと感じている。
- ・英語をはじめ、言語はコミュニケーションのためにある。楽しく使えるようになって欲しいので、個人的にはテストは要らないと思っている。完璧な英語はない。ネイティブでも間違え、国際英語になると完璧な文法は要らない。子どもたちがなるべく負担を感じず、友達と楽しく使える英語であって欲しいと願っている。

○ 事務局

ミカさん、ありがとうございました。皆様からご質問はございますか。

○ 委員

日本だと国語という授業がありますが、アメリカだとそういう授業はあるのでしょうか。

○ 講師

はい、英語の授業があります。小学校だとリーディングやライティングが国語の授業になっていたりするのですが、中学校に入ると「English」というものがあって、高校だとシェイクスピアとか色々難しいものを読みます。中学校だと、ちょっと簡単な面白そうな小説を読んで会話したり、私はこれを読んでこう思ったとかこの小説のこの部分はこういう意味なんじゃないかなというような授業なのです。

○ 委員

その「English」の授業は、学年が進むに連れてディスカッションするほうが割と多いのでしょうか。

○ 講師

そうですね、文法の話よりはディスカッションのほうが主となっています。これについてこう思うとか、自分の考えをこういう風には書けばいいとか、こういえば伝わるとかそういう勉強だと思います。文法よりはそっちのほうですね。

○ 委員

日本では国語の時間にディスカッションする授業は殆どないのではないかと思います。

○ 講師

クラスの全員で丸くなって話し合ったりグループで話し合ったりすることが、アメリカの「English」なんです。

○ 委員

子どもが家に帰ってこういう仕事がしたい、こういう将来を目指していると両親に話をしたときに、アメリカではどういう返答をするのでしょうか。

○ 講師

ゲームデザイナーになりたいと言ったらプログラムの大きい本を買ってもらいました。結局なりませんでしたが。親は一応その時点では頑張れと言いますが、高校になると現実的な話は入ってきます。弁護士が多すぎて弁護士になっても仕事は大変

だよとか、IT関係はもう仕事が見つからないからこういう仕事があるよとか。

○ 委員

日本では中学校で英語検定を頑張らせていますが、アメリカから見てああいうものはどうなのでしょう。この前高校生が、英検2級を取らないと次のステップにいけないから頑張ったという話を聞きますが。

○ 講師

勉強のためになるのであればいいと思いますが、アメリカではやっぱりそういうものはないです。日本だと漢字検定とか日本語検定とか色々ありますが、アメリカにはないですね。

○ 委員

中学生の英語検定というのは、社会に出たとき役に立つのでしょうか。

○ 講師

ちょうど3級あたりが、本当に使えるところですよ。通訳などの仕事に就くのであれば、もしかしてやった方がいいかもしれませんが、スピーキングは3級とか準2級あたりの文法だと結構使えます。

○ 委員

紫波だけではないと思いますが、自己主張をしない子がいます。そういう子には、ミカさんから見てどういう原因があるかお聞かせください。

○ 講師

私は部活動でテニスをやっています。練習試合をやって、できなかったところとできたところを喋ってほしいと言ったのですが、皆できないところから話して、下手すればできたところは言わなかった生徒もいました。団体意識からか、私はこれができるんだ、私はこれがうまいんだよというのは言いづらいのかもかもしれません。

○ 事務局

ほかにございますか。では、講話を終わります。

○ 会長

それでは事務局から報告と事務連絡をお願いします。

○ 事務局

- ・ 第5回審議会議事録について
- ・ 児童生徒数の推移
- ・ 「今後の紫波町学校教育の在り方を考える会」の運営について
- ・ 今後のスケジュールについて

○ 会長

皆様から何かご質問はございますか。
それでは、これで議長を降りさせていただきます。
ありがとうございました。

○ 事務局

以上をもちまして、第6回紫波町学校教育審議会を閉会いたします。
お疲れ様でした。

(閉 会)

(閉会 午後8時30分)